

「聖なる空間」の象徴としての「蓮華」あるいは「華」

春日井 真英

「共生」と「慈悲」、この言葉は人類に永遠につきまとうものかも知れない。グローバル化された今日では人類の未来を考える上でなおさら必要なことかもしれない。この二つの言葉は、歴史、いや、我々の生き方を問い続けてきたものの一つと云うべきだと考える。

人類は、「共生」と「慈悲」を訴え「平和」を求め、反戦を主張してきた。「宣戦布告のない戦争」と言われるベトナム戦争。人種問題、経済問題、宗教問題等から世界各地では様々な対立が起こり、対立をやめようと主張する平和運動は常にあった。対立を超えて唄われたもの一つに「花はどこに行った」^①というピート・シーガーの歌がある。原文と翻訳、唄われた過程の中で微妙な変更など、歌詞の解釈には問題があるかも知れないが、この歌には昔から人類が問いかけてきた、「平和」と「共存」を訴えるものがある。この歌の中では、「いつにな

ったら、人類はこの本質に気がつくのか？」と問いかけているのだが、詩では「哀しみ」を経験したときにのみ可能となる、としか唄っていない。

この歌詞の中で「花」は、大地から少女の胸へ、そして少女は若者の胸へと、象徴的に変化させ、戦いで倒れ、土にかえっていく男と、春になると土から花が咲くことを唄っている。そこには、永遠に終わらない愚かな人間界の縮図があると言える。大地から芽生える花が少女の胸に咲くのは大地に根ざす人間を象徴として、さら



蓮華

仏教などでは聖なる華と目されている

は神話的、地母的な女性像があると言える。そして、兵士としての男の胸に咲く花は大地の象徴としての女性であり、少女の胸に戻ることを暗示している。この歌には、声高な反戦の主張はない。人々の気づいていない愚かさへの視線が「花」によって示されていると言える。しかも反戦、愛、希望等という言葉もここにはない。人類の繰り返す愚かさの延長線上には軽い言葉などは要らないのだ。繰り返される愚かさについても、ピート・シーガーは何も言っていない。ただ、繰り返している愚かさには人々が気づかないでいることを唄っている。また作詩者は、この白い花がどんな花かについても触れていない。ただ、「花」としか唄われていない。それは、「花」という言葉に喜びと悲しみを表す力があるからなのかも知れない。人類の営みの中で繰り返され、そしてまた繰り返されようとしている人類の愚かさを唄っているのは彼だけではない。中島みゆきも「時代」と言う歌の中で、繰り返される愚かさを唄っている。

悲しくて涙も枯れ果ててもう二度と
笑顔にはなれそうもないけど

そして、続けて、いつか、「そんな時代も あったね」と話せる時代が来ることを期待している。そのときのことを彼女は、いつかみんなが故郷に辿り着ける、としているのである。この、彼女が意図した故郷がどこにあり、どのようなところかは読み取れない。しかし「帰省³」と題された彼女の作品では、「人が人を信じる」ことが年に二回ある」と言い、それは故郷か

ら帰ったときなのだという。

年に二回、しかも「八月と一月に」故郷から帰ると、なぜか人を信じることができ、もう半年がんばれるようになるというのである。なぜ年に二回か、それは日本人ならばごく当たり前のことであり、誰にでも、故郷の持つ意味が明白になる。しかも故郷から戻ると、人ははにかみながらも道を譲り合うことができるようになる。人に道を譲ること、その行為の裏には、相手を尊重する、他人を認めるという意識が隠されていると考えられる。

つまり中島は故郷に帰ることは「人を人として認め合う」とこれを可能とすると説くのである。だがそれは、人間尊重の意識の薄れを危惧していると言って良い。では彼女の求めた故郷とはどのようなものなのか。それも、人を人と思わなくなった人間性喪失の予感がする時代の中で……。故郷とは、彼女にとって「人を信じる」ことのできる気持ちを取り返してくれるところ」であり、年に二回そのことが可能になるとしている。都市化し、人々が集中するようになった都市での日常に、人間間の信頼回復への可能性を唄ってくれている。この、信頼の回復、そのことが「共生、慈悲」を考えることに通じる。中島の言葉を借りるならばそれは「故郷」に触れることであり、そのことが故郷探求という問題に重なるのである。「故郷」とはどこにもある場所かも知れない。一言で言えば、心安らぐ場所であり、自分を振り返ることのできる場所なのではなかったか。こ

の自分を振り返ることのできる場所が自己の中に内在していることをタゴールは『ギタンジェリー』³⁾で、そして同時代に海外で活躍したヨネ・野口(野口米次郎)も彼の詩集『From the Eastern Sea』『The Pilgrimage』⁶⁾等⁷⁾、心安らぐところを各々の内面に求めている。そのような場所を人々は、なぜ外に求めるのだろうか。求める理由は何だろうか。慣れ親しみ過ぎているからこそ、見いだすことができないのかも知れない。進歩し、

進化し、新しい世界、異質の世界を求めながら、結局元の世界に戻るようになるのは逆説的である。煩わしい俗世間から逃れるために旅に出るのも、故郷の良さに気がつくことでもある。そのことに気がつけば、悩むことはなくなる。しかし、異質な世界に旅立てないものは、しがらみの中で生き続けなくてはならない、その煩わしさを解消するために他人を無視し、解放されたかのような錯覚に陥る。中島の「帰省」は端的にそのことを指摘している。そして、「人を人としてみる」あるいは「人を人として受け入れるために」は、「故郷」に触れる必要があるというのだ。つまり、それは誰もが望んでいる場所でもあるのだ。ここには、大きな社会的な問題が背景にある事は否定できない。都市化の背景には、経済問題もあり、現実的な社会が変容していく現実がある。そのような中で、喪つていった故郷を求め、「人間らしさ」の回復を祈る路を、どんな時代にでもある事を指摘していると言える。中島の言う故郷とは単なる生まれ故郷ではない。この故郷は各人の心の隅に潜むところ、ど

こにでもあり、またどこにもない場所なのであろう。言うならば「初心」を取り戻すところ。つまり都会の垢で汚れる前の世界に戻ることもあったと言える。

この「人間らしさ」を取り戻せる場所とは「ユートピア」と呼ばれるどこにもない場所のことになるのだろうか。いや、人類はしたたかに、天と地を繋ぐところに「宇宙軸」を想定し、そこを聖なるところとして意味づけようとしている。この「聖なる空間」は山であれ、岩場であれ、建物の中でも自由に想定されてくると言って良い。そこは、言うなれば自分だけの場所でありながら、本来は人々も含め、あらゆるものが共有する処と、認識されるべき空間だった。アメリカ・ニューヨークの世界貿易センタービル(九・一一)の悲劇の跡地としてのグラウンド・ゼロは諸々の花で飾られ、悲しみの中に人間性を考えさせる「聖なる空間」の一つになる。

聖なる空間のイメージは地域によって異なる。原初の海に浮かぶ蓮にブラフマンが横たわり、その臍から咲く蓮華にヴィシユヌの姿を顕現させることで世界の初めを想起させている。海の始まりなどは、ここでは問題ではない。始原の水と、そこから始まる世界がイメージできればいいのである。だから、花は蓮に拘らなくてもいいことになる。だが、宝相華文のように、唐草文のように変容することも可能なのである。過酷な太陽の光や、自然の厳しさにさらされる中近東の世界では、宗教的施設の装飾に「水」および「水」を象徴する唐草模様、植物と動

物の意匠を見ることができ(6)。オアシスの緑の中に、より一層「水」を象徴する意匠は様々に姿を変えて我々の眼前に姿を現している。これは、キリスト教の教会ではバラがステンドガラスに象徴され、仏教寺院でも様々なところに蓮華が詠えられて



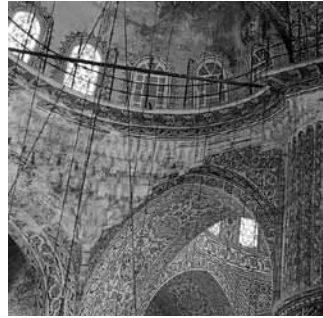
京都・清浄華院
大殿内部・天蓋が花に見立てられる



絨毯
図柄の動植物の姿は
水と豊かさの象徴と言えよう



イスファハーン (7)
シェイフ・ルトウフッラー・モスク



イスタンブール (8)
アハメディエ (ブルーモスク) 内部

るのは、価値観の二極化が原因の一つかも知れない。人口が集中した都市化が背景にあると言える。経済・産業の集中化という問題が背景に顕れてくることになる。このような問題を回避する構造が、日本では寺の構造に見ることができ(7)。古くから

いる。言うなれば、聖なる空間は視覚的にも、また理論的にもあらゆるものの根源を暗示するところと、意識されていなくてはならなかったと言いうことができる。そして、この世界とは異なる次元を意識させる別天井、あるいはドームという仕掛けが詠えられ、異なる世界の出現が象徴的に示されるのである。異質の世界の出現を予感させ、生命の喜びの源を示せる構造を表現してくれることになる。これら宗教的聖域は、世俗とは切り離される。修業する場所はまだに人間らしさを追求するという意味で聖域で在った。それは意識の中で「聖なる場所」となるのである。いや、そこは人を避け、自己を見つめるために群衆から、諸々のしがらみから逃れる処かも知れない。しがらみにとらわれていると人は、人を人と認識できなくなってしまう。中国の三国時代の「竹林の七賢」も、人を人として認識できなくなった世代に対する批判の形であった。人を人と見ることのできなくな

寺は「三門」を設け、そこを通る人に空門・無相門・無願門の三境地を経ることを象徴的に求めている。この三境地を得ることによって仏国土に至り、三解脱門を抜けることが可能であることを示している。もちろん貪・瞋・痴の三毒を解脱する境界の門、声聞・縁覚・菩薩の三乗が通る門とする解説もあるが、基本は三境地を経ることを求めていることになる。つまり、故郷とは貪・瞋・痴の三煩に無関係なところに他ならなくなる。これは、何も宗教的教義の問題ではなく、日常の場における事柄である。言うなれば、貪・瞋・痴の三煩との兼ね合いの中で生きていかななくてはならないことを意味する。人を人として見ることができなくなることは「哀しい」。この「哀しみ」の極みにあるのが戦争であり、殺戮と言うことになるのだろう。

そこに求められるのは、対話である。しかし価値の二極化の中では対話は不可能なことである。そのことは、遙か昔から認識されている事は中村元選集^⑩からでも判る。特に「対話を成立させる基盤^⑩」の中で、ミリンダ王が仏教のナーガセーナ長老と対話したときの話を引用し、王に「学者としての対論を求めた」とし、王は、「王者としてではなく、学者として対論する」ことを認める。学者としての対論、それは王者は対論に於いて、一つのことだけを主張し、従わないものを罰せようとするからである、としている。これは、二極化の中での対話、対論が難しいことを指摘しているに他ならない。つまり、対論が成立するためには「言論の自由」^⑪が保証されていなくてはならないこ

とを説いている。これは、インド思想の最も重要な特徴であり、宗教戦争なるものが回教徒侵入以前のインドでは見いだされなかった、という。

さて、ここまで「共生」のためには「言論の自由」あるいは対話に不可欠な条件について述べた。そして「慈悲」のためには「人間性」が、あるいは「人間らしさ」の確認が必要だと言うことを中島みゆきやピート・シーガーの歌を通して考えた。そして、繰り返される人類の悲劇を、嘆きを確認してきた。そのことを人類は忘れてはいない。悲劇を繰り返さ無くさせるために人類がどのように、自分たちの空間を通して、意識させようとしてきたかも論じた。そこには空間的な変化を意識させるような工夫もあり、異質な世界へと導かれる工夫もある。だが、これらは空間的構造のお膳立てに過ぎない。重要な会話、対論が交わされる場所には、さらなるキーワードが必要となろう。それは、空間と、聖なる時間との融合である。聖なる時間。一日の中で考えればカワタレ時（日の出、それは太陽の出現であり蒙昧を払い去るとき）、黄昏時（日の入り、闇と光の交わる刻限）。あるいは正午、光の最盛なる刻（太陽が南中するとき）。月単位で考えれば満月の宵（東に月を、西に日没を見られる）である。年の初め、春分、夏至、秋分、冬至あるいは星の動きなども考えられる。「共生」と「慈悲」、このことは自然の一部として人類は自覚を求めてくることになるのかも知れない。

(1) ピート・シーガー『虹の民に送る唄』社会思想社、二〇〇〇年、一五四〜一五八頁にはこの唄にまつわる話が記されている。

(2) 中島みゆき『時代』『中島みゆき全歌集』朝日文庫、一九九〇年、三九〇〜三九二頁。

今はこんなに悲しくて／涙も枯果てて／

もう二度と 笑顔には／なれそうもないけど

と、唄う。しかし、そんな時代も過去のものとなって互いに「いつか話せる 日が来る」ことを期待しているのだ。歌詞の中で繰り返されるフレーズは、繰り返される喜びと悲しみは「生まれ変わって来る別れた恋人と巡り会うため」と唄い、そのために「旅を続ける人々はいつか故郷に出会う」ためののだとしている。恋人との出会い、それが故郷に出会うことであった。

(3) 帰省

その歌では 街の人間が互いに相手を無視し合い、押しつけ合いながら暮らす情景を唄っている。これは、現代日本の都市と人間性に対する鋭い皮肉でもある。

遠い国の客には笑われるけど／

押し合わなけりや街は電車にも乗れない／

まるで人のすべてが敵というように／

肩を張り肘を張り押しつけ合ってゆく

街に住む人間の行動の特性を「まるで、全ての人を敵と見るかのように」見るのは、人間性の喪失の指摘でもある。そのような人間が、ふと人間らしさと呼び戻すのが、年に二回、八月と一月という。この時期を過ぎると、人ははにかんで道を譲れるようになり、東の人間を信じることができるようになる。もう半年がんばれる。

中島は、人間性を喪った群衆を、決まりきった身振りで街は流れてゆく、と表現し、人は多くなるほど、人ではなく物に見えてきて、ころんだ人を（助けようとはせずに）よけて、交差点を渡る。だが、そのような人間でも変わるときがあるのは故郷に触れたとき、と唄うのである。「年に二回、八月と一月／人は（倒れた人に向かい）振

り向いて足をとめる」は故郷から戻り、何かに触れてきたとき、人は他人を人として受け止めることができるようになるという。そして人々を信じることができ、人間関係の崩壊した場所で、がんばれるという。

中島みゆき『中島みゆき最新歌集 1987〜2003』朝日文庫、朝日新聞社、二〇〇三年、四二八〜四二九頁。作詞は二〇〇〇年頃のものだとされている。

(4) 『タゴール著作集』第一巻「詩集I」所収「ギタンジェリー」12、14、20等、第三文明社、一九九〇（一九八二）年、特に、20では私自身の胸の奥深くに咲いている蓮の花 と言う表現で探しているものを指摘している。それは自分自身への回帰とも言えるが、自分自身の中に在る世界の存在である。

(5) 『現代日本文学大系』41、筑摩書房、昭和五一（昭和四一）年所収野口米次郎集、一八六頁。「山上」『東海より』(From the Eastern Sea)、一九〇三年春、倫敦に出版。「蓮華崇拜」『巡礼』(The Pilgrimage)、一九〇九年。もともとは倫敦エルキン・マシューズ出版で出された。

(6) ジョン・D・ホーグ『図説世界建築史 第六巻「イスラム建築」』

山田幸正訳、本の友社、二〇〇一年。

(7) 前掲書、XXI頁。

(8) 前掲書、XX頁。

(9) 中村元、選集第一七巻「第二編 優位を獲得した普遍思想 その発端」の中に扱われている。中村元、選集第一八巻、昭和五三（昭和五〇）年、春秋社。

(10) 前掲書、一八八〜二二六頁に詳しい。

(11) 前掲書、一九三頁。

（かすがい・しんえい、宗教学・民俗学・神話、東海学園大学教授）